

神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 2 号

梶山遺跡 (2)

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 2

KAJIYAMA (2)

神奈川県立博物館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM
Naka-ku Yokohama, Japan

1 9 6 9

目 次

| | |
|---------------|----|
| 梶山遺跡第2次調査について | 1 |
| 1. 調査の概要 | 2 |
| 2. IV区の遺構と遺物 | 2 |
| 3. V区の遺構と遺物 | 4 |
| (1) 土 層 | 4 |
| (2) 第 I 貝 塚 | 5 |
| (3) 第 II 貝 塚 | 7 |
| (4) 第 III 貝 塚 | 7 |
| (5) 第 IV 貝 塚 | 7 |
| (6) 遺 物 | 8 |
| 4. 結 び | 13 |

挿図・図版目次

| | | |
|-------|------------------------|----|
| 第 1 図 | 調査区平面図 | 3 |
| 第 2 図 | 貝塚平面図 | 6 |
| 第 3 図 | 貝塚断面図 | 6 |
| 第 4 図 | 第 I 貝塚出土土器(拓本) | 9 |
| 第 5 図 | 第 III 貝塚出土土器(拓本) | 10 |
| 第 6 図 | 暗褐色土層出土土器・第 III 貝塚出土土器 | 11 |
| 図版 1 | 貝塚の位置/周辺の景観 | |
| 図版 2 | S12-S8 東南壁断面/T12 西北壁断面 | |
| 図版 3 | 貝層出土土器 | |
| 図版 4 | 表土および貝層出土土器 | |
| 図版 5 | 暗褐色土層および貝層出土の石器 | |
| 図版 6 | 骨角器および貝製品 | |

梶山遺跡第2次調査について

本調査は梶山台地東南斜面に存在する小貝塚（梶山貝塚）を対象に行なった。

この貝塚は既に発掘されたことがあり、花積下層式土器の出土が伝えられるが、同型式の細分に関連して、一部ではその出土資料を標式とする梶山式土器を設定している。しかしながら、貝塚の規模、性質その他は明らかでなく、花積下層式土器が多くの問題を含むだけに、それらの確認と一層の資料の収集が必要とされる。

そこで第2次調査では、以上の目的をもって梶山貝塚を重点的に調査し、その結果、本貝塚が小貝塚群から成るものであることを明らかにでき、同時に花積下層式土器とともに各種の良好な資料を得た。調査結果の概要は以下各項に述べるとおりである。

なお本調査については、小林幸雄、小林信房両氏ならびに明治大学考古学研究室から格別の御協力を賜わった。記して厚く感謝の意を表わしたい。

調査主催者・神奈川県立博物館長 村田良策

発掘担当者・神奈川県立博物館学芸員 神沢勇一

調査参加者・川口徳治朗、田中孝子、新井一政、梅川紀子、戸枝敏郎、
広田花代子、渡辺レイコ

<撮影>中野万年、宇田川久代（神奈川県立博物館学芸部）

安達新、市川勇、川崎和夫、奥山陸義、小野正敏、
大久保優、磯部久生、清水茂、村山昇、内田俊秀、
鈴木次郎、上川哲男、八木橋久美子、高橋芳宏、宇塚、
（明治大学）

湯川悦夫（東京教育大学）

剣持輝久（立正大学）

調査期日・昭和42年12月5日～14日

報告書執筆者・神沢勇一

1. 調査の概要

遺跡全体については第1次調査の報告で説明したので、ここでは調査の概要とあわせて、貝塚について補足するに止めたい。

梶山貝塚は横浜市鶴見区上末吉町梶山407番地にある。

前回の調査地点に続く梶山台地の東南斜面には、縁辺から中腹にある狭い段丘面（台地上面との比高 -8 m ）にかけて、谷状の小さな凹所がある。貝塚は凹所下半部に残されており、末吉台地との間に広がる大きな谷の一支谷に面している。この支谷は梶山台地の西南端を画すると同時に、分岐した一部が台地東南側に小さく湾入する。

すなわち、貝塚は二つの小谷にはさまれて台地が半島状に突出した部分の根本に位置し、谷の平坦面までの距離は約 60 m 、比高は約 15 m である（図版1）。

付近の斜面は大部分が階段状に開墾した畑地である。開墾のさい貝層の一部が破壊され、約 400 m^2 の範囲に貝殻が散布していたが、台地上面から約 5 m 下がった付近が最も濃厚であったので、この部分を中心に発掘を行なった。

第1次調査との関連を考慮に入れて、調査区は前回設定した区域を東南側に拡大することとし、 $I\sim U\cdot 1\sim 22$ のグリッドを増設、 $I\sim Q\cdot 8\sim 13$ までをIV区、 $R\sim U\cdot 8\sim 13$ をV区とした（第1図）。

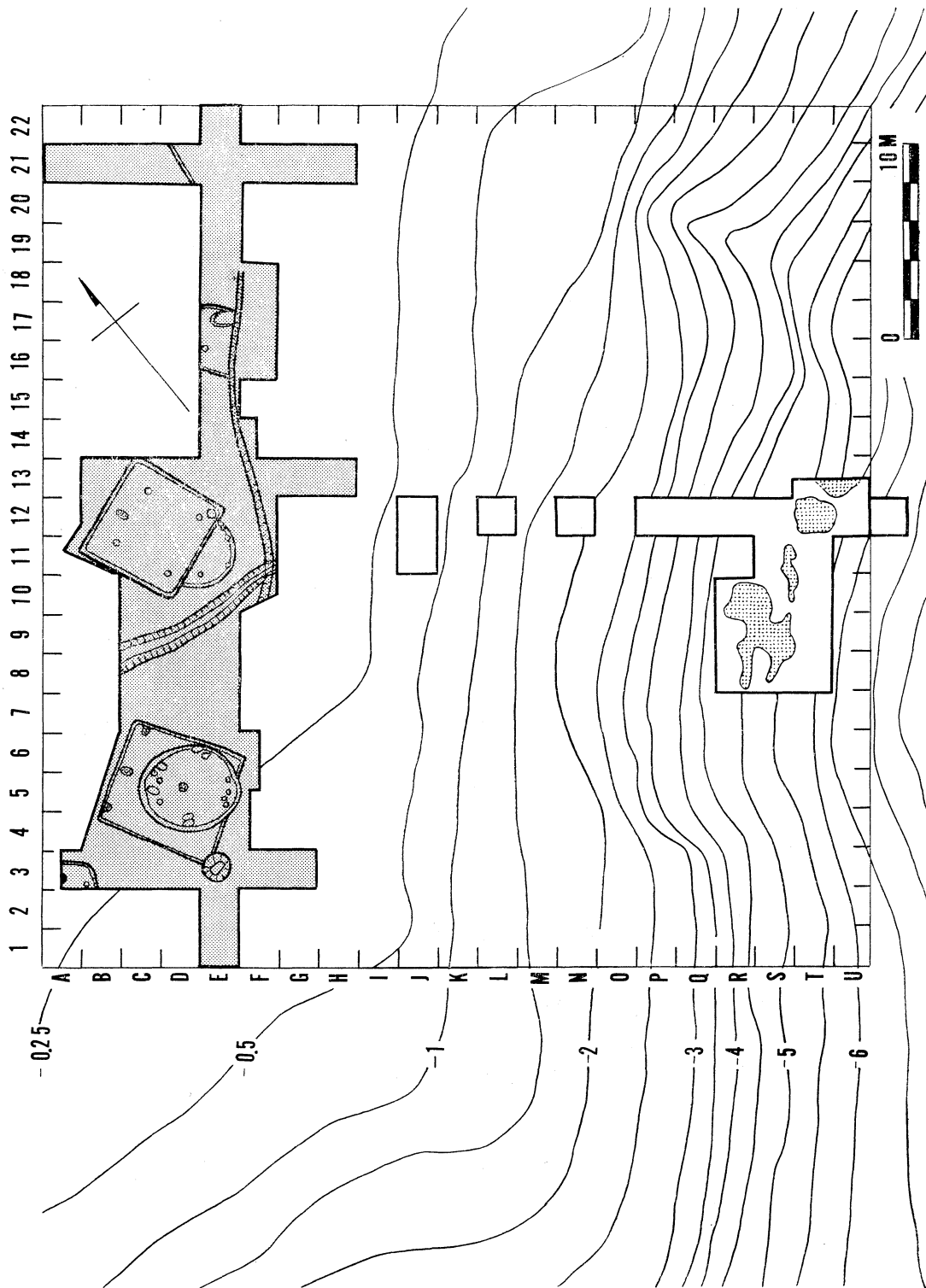
調査経過は、まず貝塚の探索と層序の把握を兼ねてJ12、L12、N12、P12の各グリッドを発掘し、T12に混土貝層を認めたので、主として貝殻の散布が多い西側に重点を置いて発掘区を拡大したところ、ほぼ同レベルに4個の小貝塚が存在した。これらを西から第I～IV貝塚と名付け、第I、第II、第III貝塚および第IV貝塚の一部を発掘した。貝塚付近は攪乱が最も多かったが、攪乱を受けない部分では、かなり良好な状態で資料を得ることができ、いわゆる花積下層期に属するものが主体をなしていた。

小貝塚群の存在を確認した時点で、隣接する斜面にボーリングの刺突を試みたが、貝塚の存在は認められなかった。

発掘面積は延 82 m^2 である。

2. IV区の遺構と遺物

IV区は台地縁辺から斜面の上半部に及んでいる。斜面はN8とO12を結んだ線付近までは



第1図 調査区平面図(網目部分は第1次調査の発掘区)

比較的緩傾斜であるが、以下の部分では急に傾斜を増す。

Ⅳ区では J12, L12, P12 および Q12 を発掘したが、P12 から Q12 にかけて、表土下半部に小さなブロック状の混貝土層が存在しただけで、遺構は全くなかった。混貝土層は、地表下約 30cm にあり、直径約 80cm, 厚さ 10~20cm で、破碎した貝殻の小片を含むもので、ハマグリ、ハイガイが主である。既に攪乱され当初の状態は不明であるが、貝の含量が多く、しかも斜面の高所にある点、Ⅴ区で発見した 4 個以外にも小貝塚が存在したことを示すものようである。この部分からは、花積下層式土器の小片が出土している。

各グリッドの層序は表土、暗褐色土層、黄褐色土層、ローム層となっており、暗褐色土層は密度の差で上層(Ⅰ)と下層(Ⅱ)に区分できる。表土から黄褐色土層までの厚さは、L13 では平均 23・25・20・15cm, P13 では平均 25・30・25・50cm で、降るに従って堆積が厚い。遺物は表土、暗褐色土層ⅠおよびⅡの上端から少量、散漫に出土した。P12・Q12 でブロック状の混貝土層があった他は、特に注意すべき所見はない。なお、第 1 次調査で発見した溝状遺構Ⅱの末端の確認を兼ねて J11 を試掘したが、遺構は認められず、一部に住居址らしい落込みが存在したが、発掘を見合わせた。

遺 物

土器破片約 20 片と石器 5 点である。

土器はいずれも小破片で、花積下層、勝坂、加曾利 EⅡ、加曾利 EⅢ の諸型式と弥生式または土師器に属するものが認められる。

石器は表土から無柄石鏃 1、暗褐色土層から礫器 1、打製石斧 3 が出土している。形態的には、前期または中期のものと思われる。

3. Ⅴ区の遺構と遺物

(1) 包含層の状態 (第 3 図)

Ⅴ区は、Ⅳ区下半の急斜面が続く R8~R13 を除いて傾斜が幾分少なく、U8 と (V12) を結んだ線のあたりで段丘面に接する。

Ⅴ区においては、R11 を除く R~T・8~13, U12・13, および U12 に隣接する部分 2 × 2 m (V12) の各グリッドを発掘した。

開墾、耕作その他による攪乱と土層自体の凹凸のため、各グリッドの状態はかなり複雑であるが、基本的な層序は表土、暗褐色土層、黄褐色土層、ローム層となっており、降るに従って

堆積が厚くなる。また地山の傾斜とともに西南から東北に向って厚さを増し、U12・(V12)では堆積が最も厚く、暗褐色土層と黄褐色土層の間に多量の有機物を含んだ黒色土層が挿まる(第3図)。

表土は耕作土および腐植土で、第Ⅰ貝塚、第Ⅱ貝塚、第Ⅳ貝塚の上部からそれらの周辺では、一部混貝土層の状態になっている。この混貝土層は貝がこまかく破碎して、攪乱により破壊された貝層が拡散したものと考えられる。しかし、R8～R10においては第Ⅰ貝塚よりも上方の斜面から続いており、比較的広範囲に及ぶことは、Ⅳ区P12・Q12にも小規模ながら認められたことと共に、かつて別個の小貝塚が存在していた可能性がある。

暗褐色土層は上半部が多少軟質である。密度の差によって一応上下2層(暗褐色土層Ⅰ・Ⅱ)に区分できるが、土質自体は異ならず、部分的には識別し難い場合も多かった。貝塚は下層の上面に堆積している。下層上面には凹凸が多く、貝塚は、なだれ落ちた貝殻が、そのくぼんだ部分に引掛かって、溜ったような状態で堆積していた。第Ⅰ貝塚では、その傾向が特に顕著で、平面形も不整である。

黄褐色土層はローム質の土層で、ローム層へ漸移的に移行する。

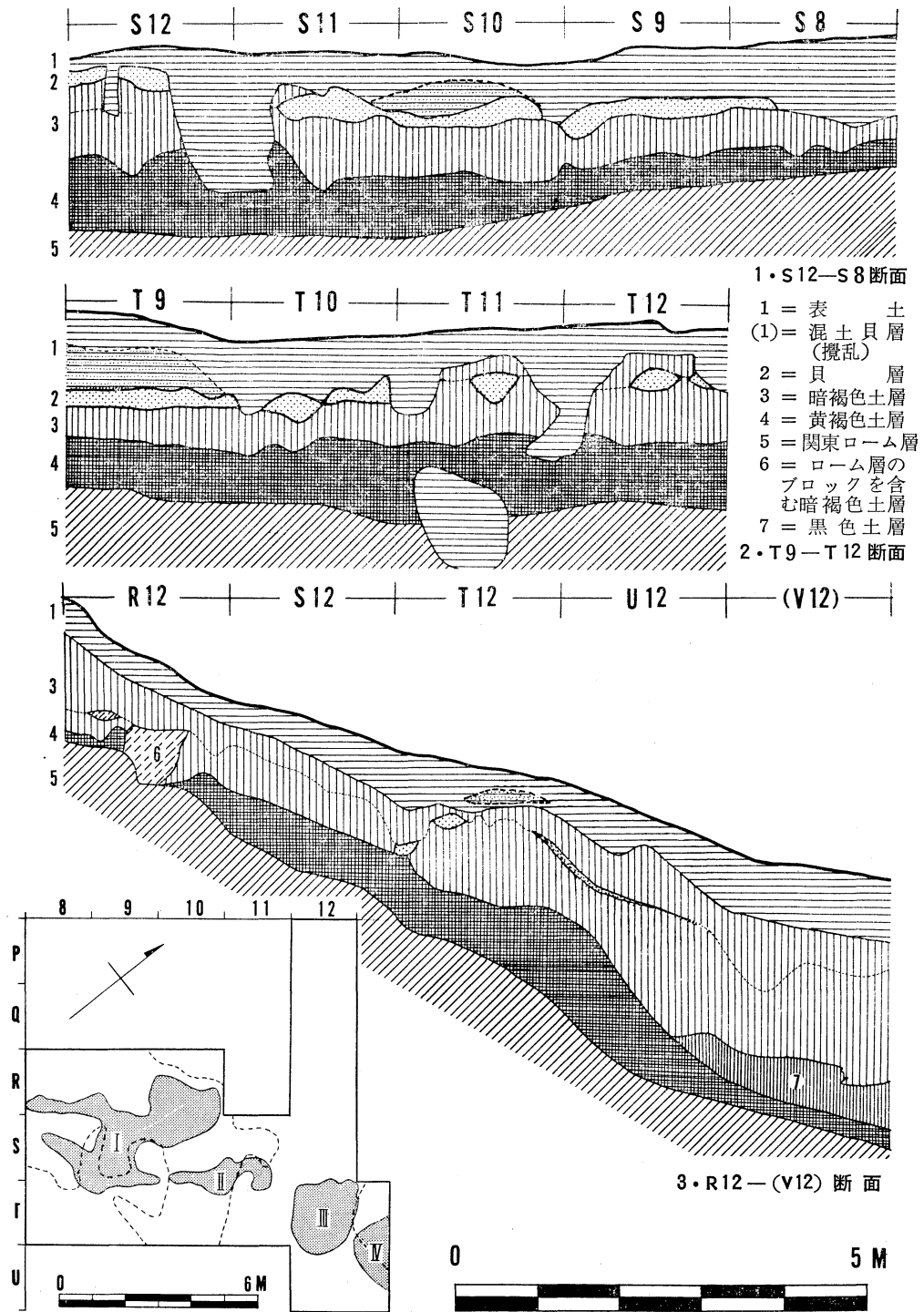
遺物は表土、暗褐色土層Ⅰ、暗褐色土層Ⅱ上端から出土し、S～T・8～12に多かった。表土および暗褐色土層の上半部では攪乱されない部分も含めて、花積下層式及び木島式、阿玉台式、勝坂式、加曾利EⅠ式、同Ⅱ式、同Ⅲ式、称名寺式、堀の内Ⅰ式、宮の台式、久ヶ原式、弥生町式、五領Ⅰ式等、縄文時代前期初頭から古墳時代前半までの諸型式の土器破片が認められたが、花積下層式土器を除いて、量は少ない。暗褐色土層Ⅰ下半部から暗褐色土層Ⅱ上端にかけては、器形、文様のバラエティが多いが、ほぼ単一の様相を示す土器だけを包含しており、これらは花積下層式土器に含められるものである。

U12・(V12)の表土および暗褐色土層中には、中期以後の土器が他のグリッドよりも多く存在したが、この地点は斜面の裾で最もくぼむため、落下した破片が集中したらしい。遺物の出土には地点別の差はみられない。

(2) 貝 塚

((1)) 第Ⅰ貝塚

R～S・8～11, T8, T9におよぶ混貝土層で、6×3.5mの規模をもつ。貝層の堆積面(暗褐色土層Ⅱ上面)に凹凸が多く、S9中央ではやや大きな凸部があり、貝層に一部断絶したような状態がみられたが、数ブロックの貝層が集合したものであることを積極的に示すよう



第 2 図 貝 塚 平 面 図

第 3 図 貝 塚 断 面 図

な形跡はない。

貝層の上部は開墾のさい破壊をうけている。現存部の厚さは平均 20cm 、最も厚い部分で約 30cm である。貝に破碎したものが目立ち特に東南側の S 8、S 9 断面付近の下半部では非常にこまかく破碎していた。

貝の種類は、ハマグリ、チョウセンハマグリ、オキシジミ、カガミガイ、サルボウ、ハイガイ、オオノガイ、マテガイ、マガキ、アカニシ等で、このうちハマグリが最も多く、カガミガイ、オキシジミ、ハイガイ等がこれに次いでいる。

自然遺物は前記の貝殻のほか、鹿角、猪牙、それらの肢骨断片等が 10 数個出土した。また下部の破碎した貝殻の多い部分では魚骨と鱗の存在が目立ったが、遺憾ながら同定の結果がまだ出ていない（以下の 3 貝塚出土の例も同様である）ので、おって何らかの形で補足することとし、存在だけの記載に止まる点を許して頂きたい。

遺物の包含は多い方ではない。土器は暗褐色土層 I 下半部および同 II 上端から出土するものと同じく、花積下層式に含められるものである。

((2)) 第 II 貝塚

S~T・10~11 に存在した混土貝層で $3.1\text{m} \times 1.1\text{m}$ の規模をもつ。貝層上面は削り取られ、現存部の厚さは平均 20cm 、最も厚い部分で 40cm で、下半部では貝殻がこまかく破碎している。貝層の堆積面付近の暗褐色土層中に、直径 40cm 前後、厚さ 20cm 程度で硬い部分があったが、性質は明らかでない。

貝層を構成する貝の種類、比率、遺物の包含状態は第 I 貝塚の場合と同様である。

((3)) 第 III 貝塚

T12 を中心に存在した混土貝層で、 $2.3 \times 2.1\text{m}$ の規模をもち、一部に小規模な攪乱があるだけで、旧状を最も良く残している。貝層は暗褐色土層上面の凹所を埋めて堆積し、最も厚い部分で 40cm をはかる。堆積面から約 20cm 、 $1.8 \times 1\text{m}$ の範囲は純貝層にちかく、この部分では貝の破碎はごく少ない。

貝層を構成する貝の種類、遺物の包含状態は第 I 貝塚と同様であるが、魚骨や獣骨等の出土は幾分少なかった。

((4)) 第 IV 貝塚

T13・U13 を中心に存在した混土貝層である。本貝塚は調査日程の都合で約 2 分の 1 を発掘して調査を打切った。発掘部分における最大規模は長さ 2m 、厚さ 35cm である。貝層は暗褐色土層 II 上面の浅い凹所に堆積し、貝層上面は、ほとんど盛り上がりせず、斜面の傾斜と大体一

致する第3図 R12・(V12)断面に現われているのは上面の末端で、U13断面の部分では、20～30cm深く貝層が落ち込む。貝層の保存状態が良く、末端部以外では貝殻は破碎していない。

貝層を構成する貝の種類にハマグリがかなり多く、自然遺物で魚骨、獣骨がほとんど出土しなかった点を除けば、遺物の包含状態その他は第I貝塚の場合とほぼ同様である。

(3) 遺 物

総量はリング箱3個を満たす程度で、土器、石器、骨角器、貝製品、ペンガラおよび切削痕のついた鹿角等がある。

((1)) 土 器 (第3図～5図, 図版3・4)

表土、暗褐色土層I上半部、貝層および暗褐色土層IIの攪乱部分からは、前に述べた中期以降の諸型式が少量出土したが、特記すべき所見がないので省略し、主体をなす土器だけをとりあげる。それらは、いわゆる花積下層式土器の範疇にあるもので、地点、層位による差はない。

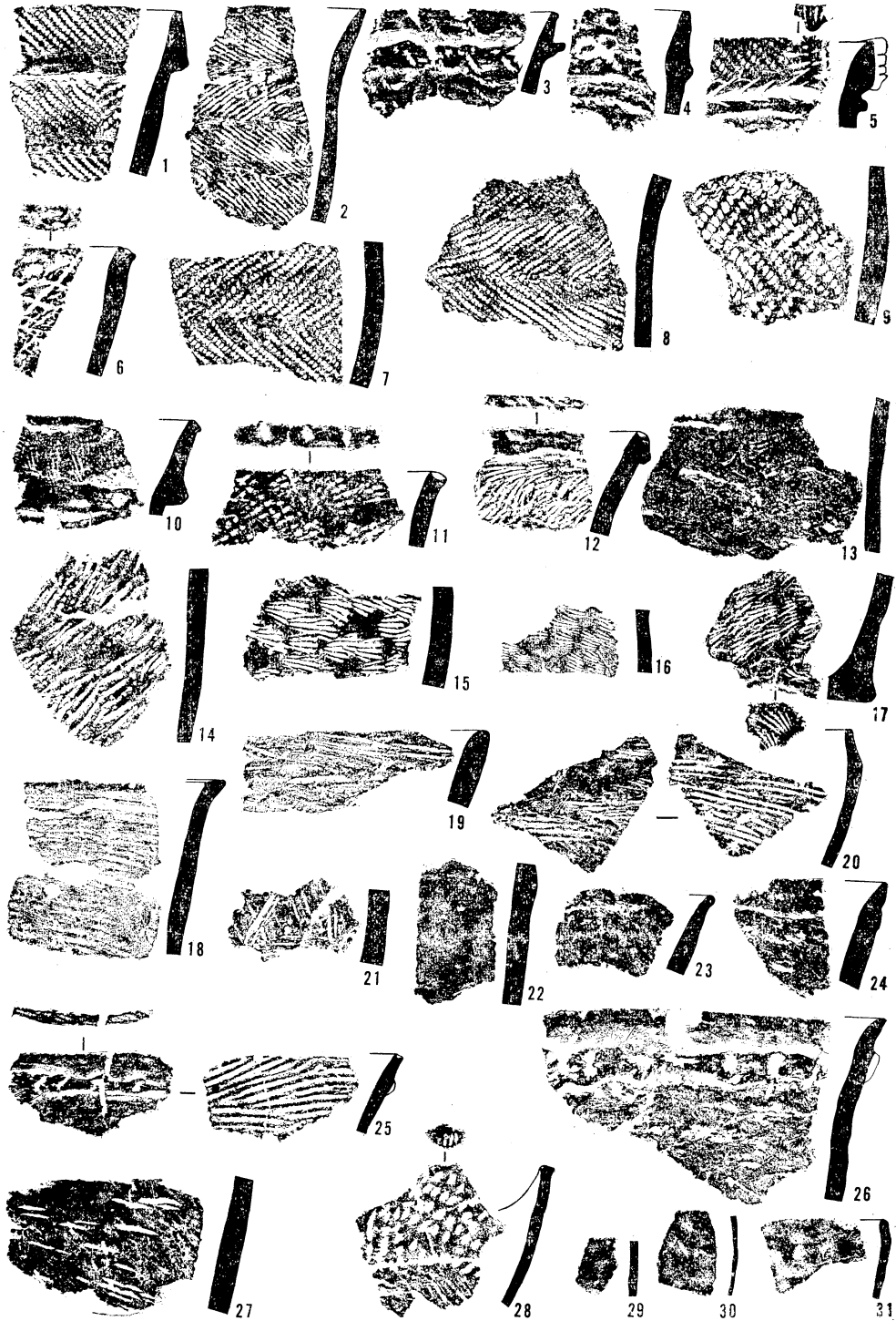
器形は深鉢形で、高さ30cm前後が普通である。平縁と波状口縁とがあるが、後者は少ない。前者には複合口縁がある。底は大部分上げ底で、平底は少なく、条痕を付けた土器に2例だけ尖底状の底がある。器壁は一般に厚く、多量の繊維を含み、色調は黒味があった暗褐色を呈している。文様と形状に変化が多いが、おもに文様の種類から、7類に分類できる。

1類・単節または無節の羽状縄文をつけたもの(1～3, 5～9, 32～36, 62, 63, 78)。施文が底面に及ぶ例もある。一般に頸部がくびれた器形で、頸部に凸帯をめぐらす例が多い。口縁は平縁の複合口縁が普通で、刺突文や沈線文(36)、突起をつけた例(5)がある。

2類・絡状体圧痕文を中心に文様帯を構成したもの(3, 37～39, 60～62)。器形は1類と同様なもののほか、波状口縁(37)や、口縁直下に凸帯をもち、頸部のくびれない鉢形土器(3)もある。絡状体圧痕文は頸部以上に施文し、下半部には羽状縄文を付けている。

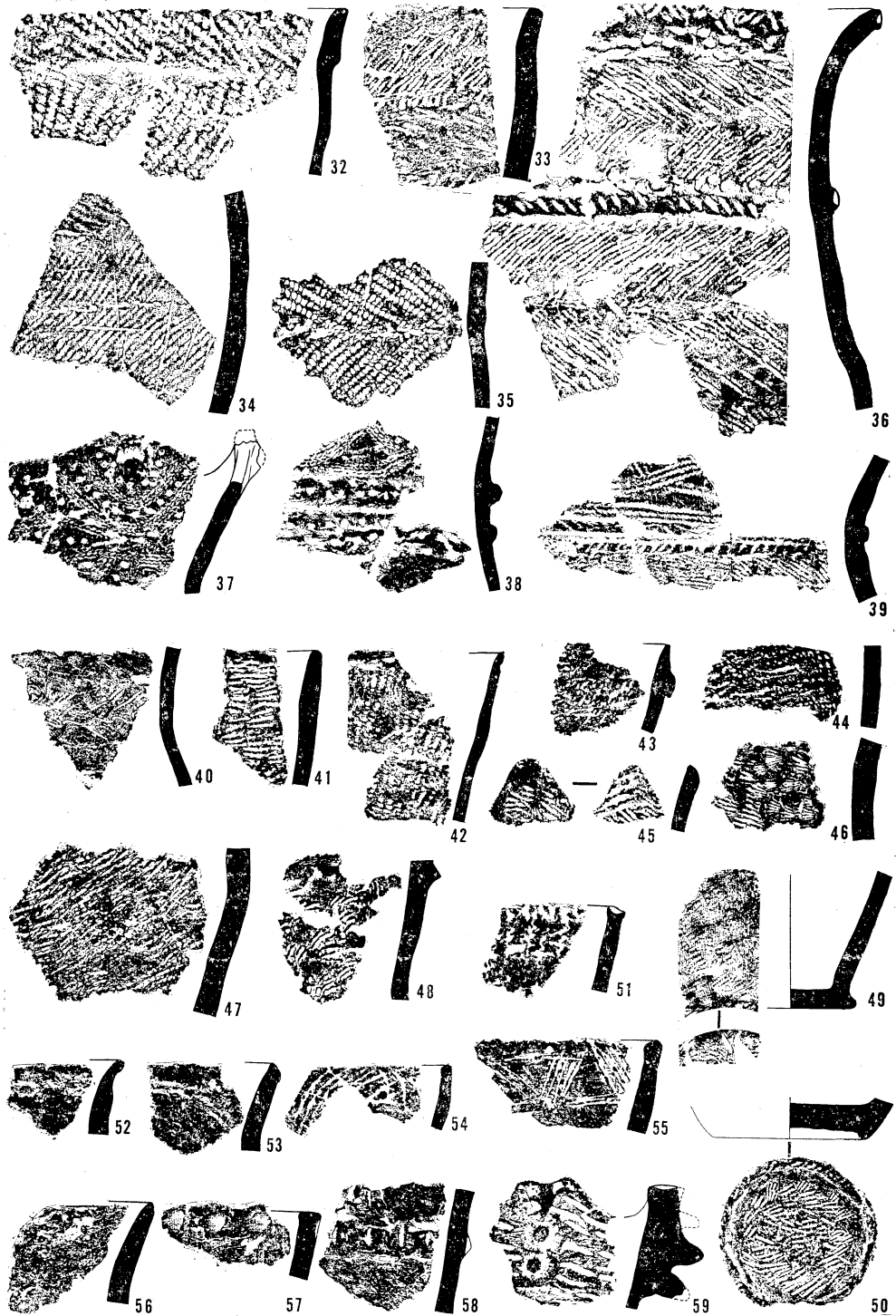
3類・ハイガイ等の背面を押捺した貝殻文を付けたもの(10～17, 41～55, 64～68, 77)。施文は口縁上端、内面、底面にも行なわれることがある(66, 49, 50)。器形は頸部のくびれない鉢形で、凸帯が付く場合は口縁直下に限られている。11には器面の丹彩が認められる。なお、口縁の押捺に貝殻腹縁を用いた例があるが、51では器面にも同じ施文を行なっている。

4類・貝殻背面または繊維束による条痕を付けたもの(18～21, 52, 53, 69, 70)。口縁から底部まで、ほぼ直斜の状態を示す単純な深鉢形が多く、複合口縁と波状口縁はない。口縁直下に凸帯をめぐらす例が多少みられる(70)。本類では、上げ底よりも平底の方が多く、また



第4図 第I貝塚出土土器(縮尺 $\frac{1}{3}$)

2. 無節繩文, 1・5・7~9 単節繩文, 3・6 絡状体圧痕文, 16~17 貝殻文
 18~21 条痕文, 22~26 無文, 27・28 刺突文, 29~31 木島式土器



第 5 圖 第 III 貝塚出土土器 (縮尺 $1/3$)

32・35 單節繩文, 33・34・36 無節繩文, 37~40 絡状体压痕文
 41~51 貝殻文, 52・53 条痕文, 54・55 沈線文, 56~58 無文, 59 刺突文



第 6 図 暗褐色土層出土土器 (60~76) ・第Ⅲ貝塚出土土器 (77, 78) (縮尺 $\frac{1}{3}$)

80・絡状体圧痕文, 62・63・78 縄文, 64~68・77貝殻文, 69・70条痕文
71~74, 無文 75 沈線文, 76 刺突文

貝殻条痕をつけた尖底が2例ある。

5類・捺痕または無文の土器(22～26, 56～58, 71～74)。器形はほぼ4類と異ならないが、少数ながら波状口縁(71)や頸部から胴の上半部に凸帯を付けた例(58)がある。また、口縁上に貝殻腹縁による押捺(73)や、内面に貝殻条痕を付けたもの(25)が少数ある。

6類・例数の少ないものを便宜上本類に一括したが、一部は他類に付随している。これらは細描きの沈線文(54, 55)、刺突文的な沈線文(27, 59, 75)、竹管刺突文(76, 102)、半裁竹管文(101)等をもつもので、器形は様々である。なお、図版4-102は、波状口縁の頂部に、獸面を思わせる突起を付けている点が注意される。

7類・本地域としては異質の土器を一括した。これには花積下層式土器に共伴が知られる木島式土器の破片6個(29～31, 94, 95)と石山式土器の系統をひく破片数個がある(28)。

以上の各類の割合は、暗褐色土層では有効資料314例中、1類16.2%、2類1.2%、3類33.4%、4類14.6%、5類28%、各貝塚出土の有効資料613例中、1類21.5%、2類3%、3類35%、4類11.4%、5類22%(貝塚別でもほぼ同じ)となっており、貝殻文、羽状縄文、無文、条痕文が主体的存在(ただし無文については、胴部および底部付近では文様を欠く土器があるので、誤差が他より大きいと思われる)であると考えられる。

((2)) 石 器 (図版5)

V区からは104個の石器が出土した。種類別および層位別の出土数は本文末尾の表(13P)のとおりで、表土および暗褐色土層I出土の一部を除き、花積下層式土器に伴うものと認められる。整形した石器はきわめて少なく、小型局部磨製石斧1(109)、打製石斧1(110)、石皿2をかぞえるにすぎず、いわゆる礫器が大部分である。礫器には、15×10×5cm程度の扁平な礫の一端を剝離して刃を付けたもの(130, 131)、同様な形状で他端にも剝離を加えて粗く整形したもの(108, 114, 132)が特徴的で、前者には115のように大型の例もある。片面に自然面を残す大型の剝片に加工したもの(112, 113, 133)も多い。また、剝片石器(111, 129)は少なく、特に黒燐石が剝片石器を含めてほとんどないことは、後に述べる多量の貝刃の出土と関係があると考えられる。そのほかでは砂岩製の石皿1例の出土が注意されよう。

((3)) 骨 角 器 (図版6-116～122)

骨角器は7例出土したにすぎない。121は鹿角製の釣針の破片で、外側にかえしをもつ。122は製品か否か断定し難い。他の5例は尖頭形骨器で、117が比較的入念に整形されているほかは、部分的に粗く加工している。119・120はエイの尾刺を利用したものである。

((4)) 貝製品 (図版6-123～126)

貝刃 101 個がある。二枚貝の腹縁に剝離を加えて刃を付けたもので、刃幅の広狭と加工法によって 3 群 6 類に大別できる。素材の種別はハマグリ 96 例、カガミガイ 3 例、オキシジミ 2 例となっている。詳細については神奈川県立博物館研究報告 2 号の報文を参照されたい。

((5)) そ の 他

ベンガラ・二枚貝の内側に付着した状態で 4 例と直径 1～3mm の塊りが 2 例出土した。貝の種別はサルボウ、オオノガイ各 1 (第Ⅰ貝塚)、ハマグリ 2 (第Ⅱ貝塚、第Ⅲ貝塚) で、ハマグリ 2 例では、厚さ約 0.5mm 前後に厚く付着している。単独出土例は第Ⅰおよび第Ⅲ貝塚から出土した。

土錘・表土および暗褐色土層Ⅰから、土器破片の両端に紐掛けを刻んだ土錘 6 個が出土した。土器型式は中期および後期に属するものである。

4. 結 び

以上の各項に述べたように、今回の調査によって、梶山貝塚が少なくとも 4 個の小貝塚群から成るもので、時期的にはすべて花積下層期に属することを明らかにできた。遺物は、攪乱が多かったにもかかわらず、かなり良好な資料が出土した。細部の検討と他遺跡出土例との比較検討が完了していないので、本報告書では概要だけに止まったが、土器は花積下層式のなかでも新しい部分に属するものと考えられる。また、貝刃 101 個、石器 104 個、をはじめとする各種遺物のうち、貝刃については研究結果を発表したが、土器、石器等についても、検討の完了をまって、改めて報告を行ない、責を果したいと思う。

V 区 出 土 の 石 器

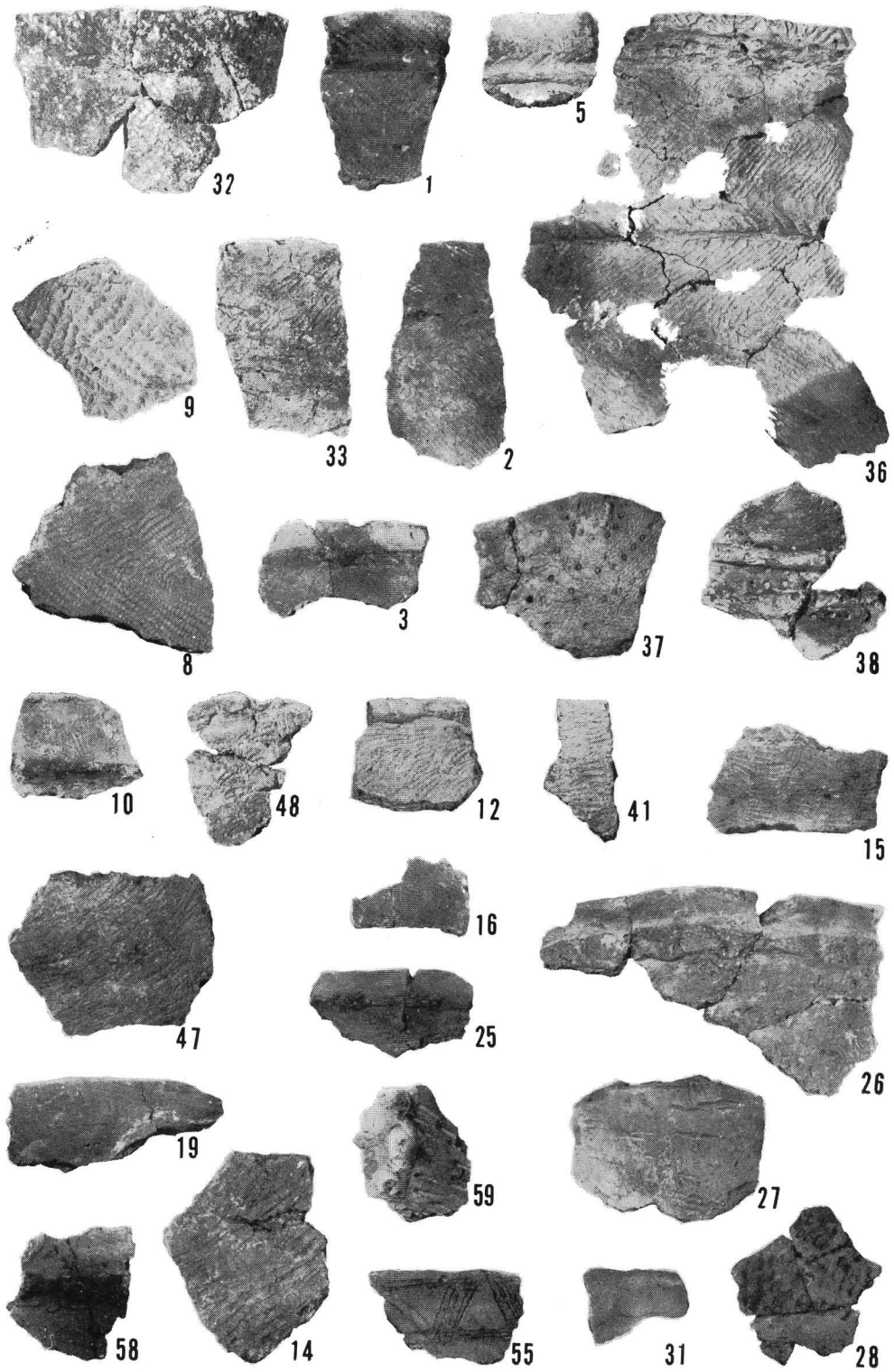
| 種 別 | 層 位 | | 第Ⅰ貝塚 | 第Ⅱ貝塚 | 第Ⅲ貝塚 | 第Ⅳ貝塚 | 計 |
|-------------|-----|-----------|------|------|------|------|-----|
| | 表 土 | 暗 褐 色 土 層 | | | | | |
| 局 部 磨 製 石 斧 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 打 製 石 斧 | 5 | 9 | 3 | 0 | 1 | 0 | 18 |
| 礫 器 | 27 | 15 | 5 | 1 | 6 | 3 | 57 |
| 剝 片 石 器 | 4 | 7 | 1 | 2 | 1 | 0 | 15 |
| 磨 石 | 6 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 10 |
| 石 皿 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| そ の 他 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 計 | 42 | 34 | 12 | 4 | 9 | 3 | 104 |



貝塚の位置(円内) / 周辺の景観

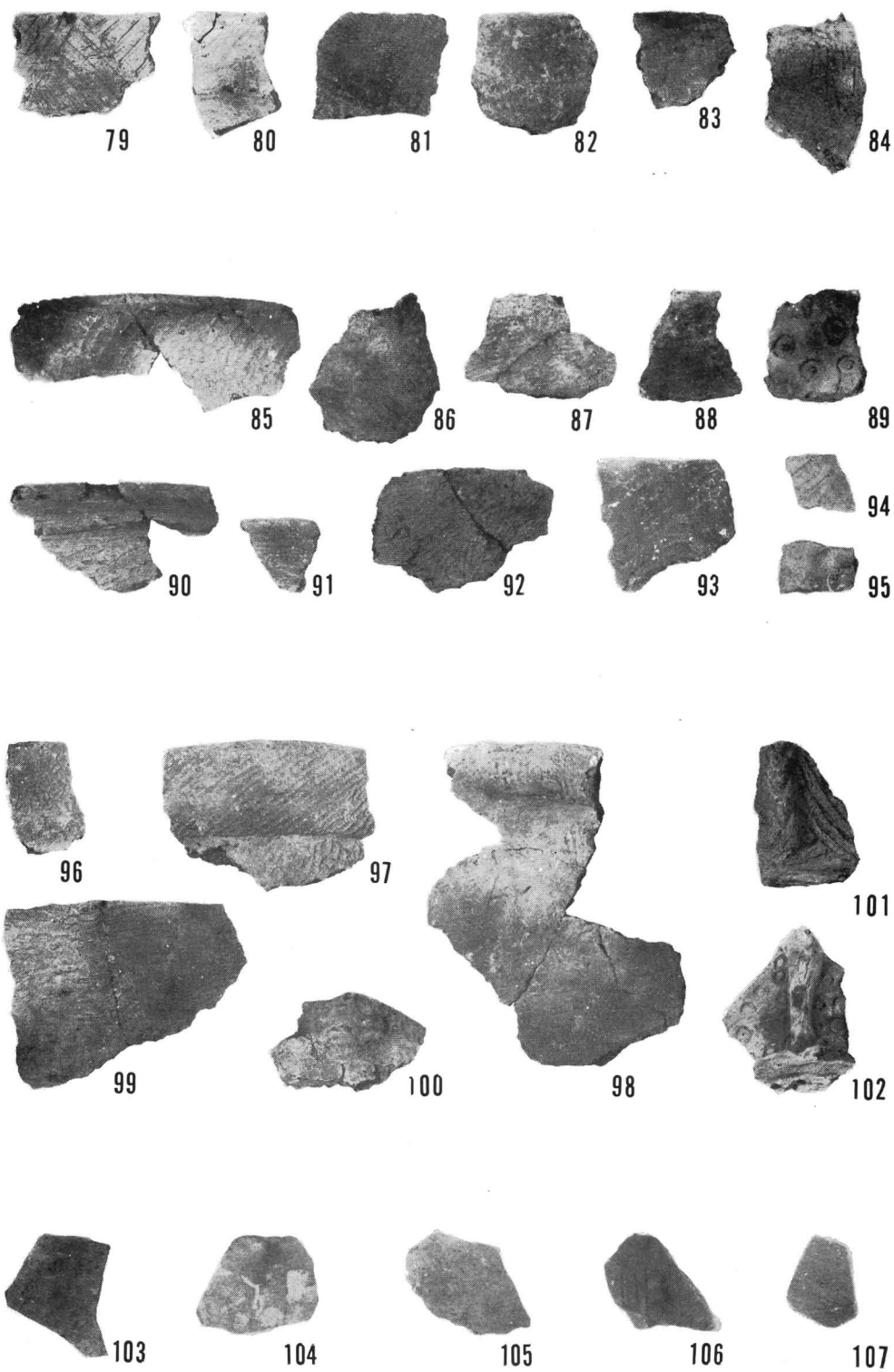


S 12 - S 8 東南壁断面 / T 12 西北壁断面 (第Ⅲ貝塚末端部)

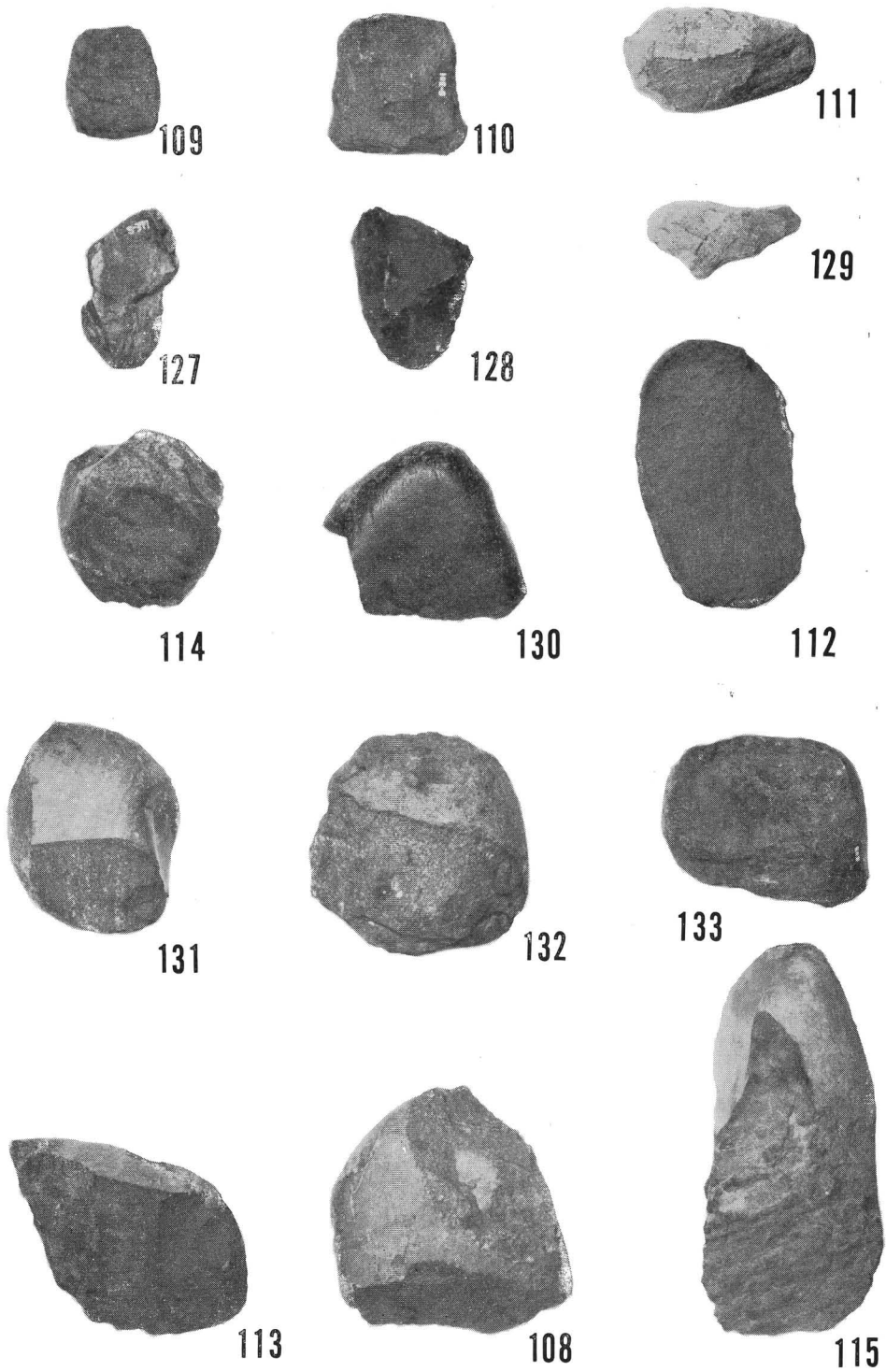


貝層出土土器(縮尺 $1/3$)

1~3, 5, 8~10, 12, 14~16, 19, 25~28, 31 第I貝塚
32, 36~38, 41, 47, 48, 55, 58, 59 第III貝塚

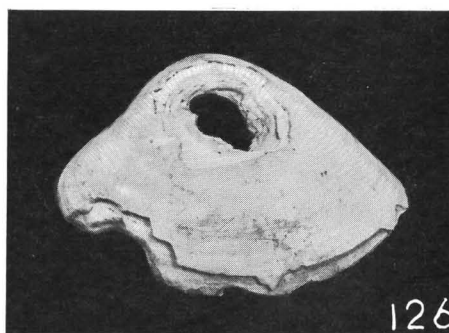
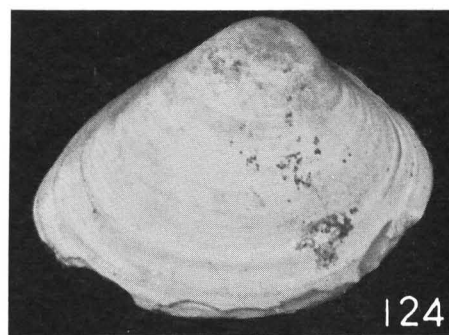
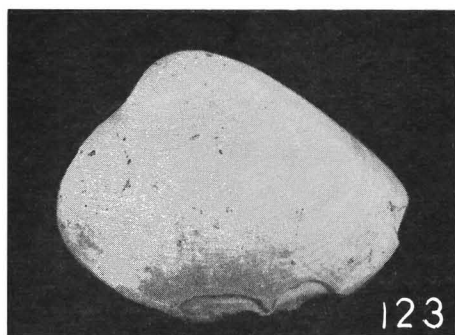
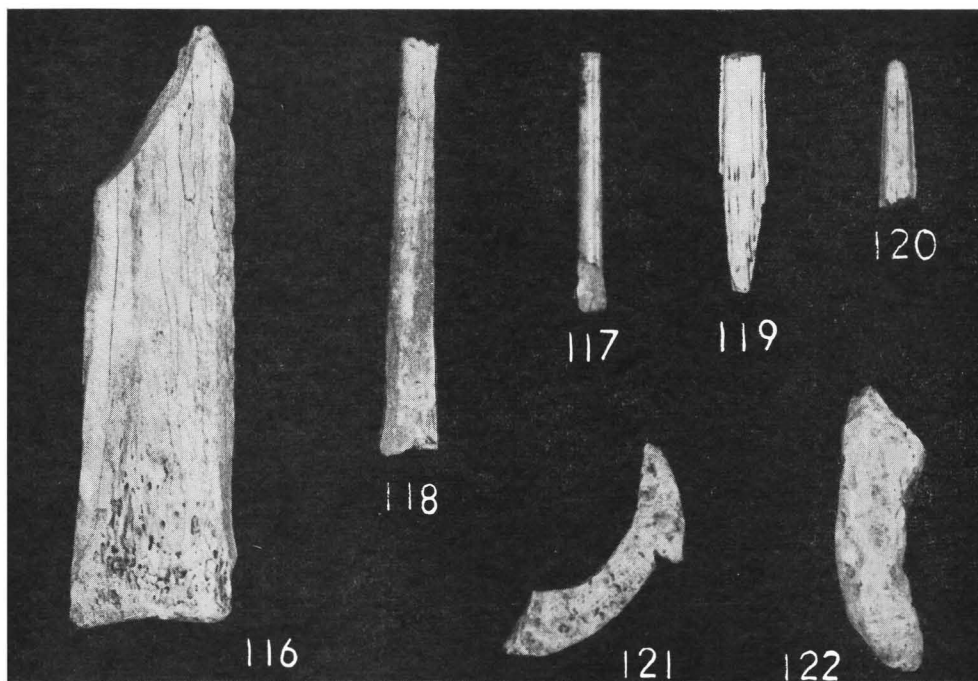


表土および貝層出土土器(縮尺 $\frac{1}{3}$)
79~84 第II貝塚 85~95 第IV貝塚 96~106 表土
(木島式土器 94, 95, 103~107)



暗褐色土層および貝層出土石器（縮尺 $1/3$ ）

109 暗褐色土層. 110, 113, 115, 127, 128, 132 第Ⅰ貝塚
108, 111, 112, 129 第Ⅱ貝塚. 130, 131, 133 第Ⅲ貝塚



骨角器および貝製品

116~120 尖頭器、121 釣針、122 (不明)、123~126 貝刃

116~122 (縮尺 $1/1$)

123 4.8×5.9cm, 124 5.5×7.2cm, 125 3.6×4.2cm

123 6.8×8.3cm

昭和44年3月25日印刷
昭和44年3月31日発行

編集兼発行者
神奈川県立博物館

村田良策
横浜市中区南仲通5の60

印刷所(有)白秀堂印刷